

ソ連の資源 エネルギー事情

小川 和 男

資源の豊庫シベリアを擁するソ連は世界最大の天然資源生産国。その量は世界第二の工業生産を維持するに十分だが、開発条件の劣悪化や輸送・開発技術の後進性、開発機器の不足など問題点もなしとしない。80年代には石油危機が、との声も聞かれるソ連の資源・エネルギーの全貌。



KYOIKUSHA

入門新書

小川 和男 (おがわ・かずお)

1935年 東京に生まれる。

1961年 東京外国語大学ロシア語科卒業
東京都総務局統計部，日本貿易振興会調査部を経て，
現在，ソ連東欧貿易会調査部長・主任研究員。

主要著書

『東西貿易の知識』(1971年・日本経済新聞社)

『日中貿易入門——経済交流の現状と将来』(1972年・日本
経済新聞社，共著)

『シベリア開発と日本』(1974年・時事通信社)

『共産圏市場へのアプローチ』(1975年・日本経済新聞社)

『東西経済関係——日本の対応と選択』(1977年・時事通信
社)

時事問題解説・144

ソ連の資源エネルギー事情

定価400円

著 者——小川 和男

発行者——高森 圭介

発行所——株式会社 教 育 社

販 売——教育社出版サービス株式会社

〒102 東京都千代田区富士見 2-11-10 丸十ビル

電話 (03) 264-5477 (代)

(分)1233 (製)71444 (出)1498 © 教育社 1978年

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ソ連の資源エネルギー事情

目次

概要	7
----	---

第1章 世界最大の天然資源賦存と生産	15
--------------------	----

1 エネルギー資源	15
-----------	----

将来性に富む天然ガス／西部シベリアに超大型ガス田が集中／世界最大の産油
国の埋蔵量は未公表／主要産油地域の変動／西部シベリアの大油田が主役に／
将来の有望産油地域／世界最大の石炭生産量と埋蔵量／開発率低い水力資源／
高まる原子力発電の役割／泥炭・オイルシェール・薪材

2 鉄鉱石とマンガン鉱石	49
--------------	----

四〇〇年分の鉄鉱石／マンガン鉱石も世界最大

3	非鉄金属資源……………	53
---	-------------	----

4	森林資源……………	58
---	-----------	----

世界最大の森林資源／シベリア・極東地域に七〇％以上が集中

第2章	ソ連の資源需給の現状……………	63
-----	-----------------	----

1	ソ連の経済発展方向と工業生産力……………	63
---	----------------------	----

世界第二の工業生産力／高度経済成長の要因と弊害／量から質への基本的転換

2	資源需給の動向……………	77
---	--------------	----

国内自給自足体制の確立／エネルギーの需給バランス／エネルギーの種類別生

産構造／一九七六―一九八〇年のエネルギー生産の特徴／原燃料の節約課題

3	資源の輸出とその重要性……………	94
---	------------------	----

高まる対西側先進諸国貿易の重要性／ソ連の輸出入商品構造の特徴と問題点／

東欧への原燃料供給の意義／最大の輸出商品―石油／中東原油輸入の可能性／

将来は天然ガスが主役

4	エネルギー需給の将来予測	113
---	--------------	-----

CIAによる予測／西側専門家の需給見通し／米国議会合同経済委レポートの
見通し

第3章	ソ連の資源開発の問題点	125
-----	-------------	-----

1	資源生産の中心地と消費地の遠隔化	125
---	------------------	-----

工業生産の欧露地域集中／天然資源の偏在／先鋭化する資源輸送問題

2	悪化する資源開発条件	134
---	------------	-----

苛酷な自然条件・気象条件／嵩む開発経費

3	開発技術の後進性と開発機器の不足	140
---	------------------	-----

開発技術の後進性／開発機器の不足と対西側依存

4	探査活動の遅れも顕著	144
---	------------	-----

第4章	ソ連の資源開発の将来	147
1	資源開発国際化の方向	147
	増幅する開発上の困難／拡大する諸外国への開発協力要請	
2	日ソ・シベリア開発協力の展開	152
用語解説		157
参考文献		167

概 要

ソ連経済最大の特徴はなにかといえ、それはソ連が世界最大といえる超資源保有国であり、しかも大規模な資源開発が進み、ほとんどあらゆる天然資源について国内自給自足体制を確立していることである。エネルギー資源をはじめ諸資源の需給が世界的に逼迫し、激しい国際資源獲得競争の火花が散っている状況のもとで、今日のソ連が、米国に次ぐ世界第二の工業大国に成長しながら、資源をもてる国であることは、特筆すべきであると考えられる。

ソ連は現在、原油、石炭、鉄鉱石、マンガン鉱石などの生産において世界第一位、天然ガスにおいて第二位である。ほかに、さまざまな重要非鉄金属鉱石に

ついで世界有数の大生産国であり、金やダイヤモンドの生産量も南アフリカに次いで大きい。木材の伐採量も非常に大きい。しかもソ連は、そうした資源の国内需要を自足しているばかりでなく、大量に輸出しており、たとえば石油は、ソ連のもっとも重要な輸出品であり、一九七六年の石油（原油と石油製品）輸出量は一億四、八五〇万トンにも達している。

ソ連の目下のエネルギー需給バランスは余裕に満ちたものである。ソ連のエネルギー政策は、ソ連経済の必要に応じて、長期的見通しのうえに立ち、きわめて総合的、計画的なものであり、かつ経済性を重視している。それと同時に、原子力利用の可能性、泥炭・オイルシェールの活用、さらに太陽熱・地熱・風力・潮力の利用までを考慮し、さらに広大な国土のひろがりのなかで地域的特殊事情にまで配慮した、非常にきめ細かいものでもある。そして、巨大な石油、天然ガスお

よび石炭資源埋蔵量を基盤に、将来にわたってソ連はエネルギーの自給自足を堅持し、輸出国の地位を保ち続けるとみられる。

しかし、西側の一部では、ソ連が資源開発、とくに石油開発において大きな困難に直面している事態を非常に重視し、一九八〇年代になるとソ連のエネルギー需給が極度に悪化するという悲観的予測が盛んである。一九七七年に発表された米国CIAの予測はもつとも悲観的であり、一九八五年になるとソ連が原油のネット輸入国に転落するとみている。これは国際的に大きな反響を呼び起こした。現在石油の大輸出国であるソ連が、七〇八年後に大輸入国に変容するような事態が現実に残れば、世界のエネルギー需給バランスに大きなインパクトを与え、混乱をひき起こすおそれ強いからである。

たしかに、ソ連当局は資源開発において非常に重大な困難に直面している。世界の全陸地面積の約七分の一を占める広大な地域的広がりをもつソ連経済のなかで、諸資源生産の中心地は、従来の「欧露地域およびウラル地域」から、いわゆる「東部地域」に急速に移っている。しかも、資源の賦存状況からみて、東部地域の重要性は今後高まるばかりである。

一方、ソ連の工業中心地は欧露地域にあり、今日、ソ連の工業総生産高の約八〇％は欧露地域で生産されている。そして、ソ連の学者たちや計画立案当局者たちは、資源生産地と工業生産地、すなわち資源消費地との離隔が将来も基本的には大きく変容しないとみている。

以上のように工業生産中心地と資源生産地が遠隔化し、さらに新しい資源生産

地域であるシベリアや中央アジアの開発条件がきわめて苛酷であることから、ソ連は資源開発を促進し、輸送システムを増強するうえで、苦境に追い込まれていくわけである。事態を改善するためには、まさに莫大な資金と開発機械・技術が必要である。

ソ連は、苦境打開策の一環として、東欧諸国はもちろん、日本、米国はじめ西側諸国に対して広くシベリアを中心とする資源開発への協力を要請し、西側の資金ならびに機材・技術の導入をはかろうとしている。ここに、本来はソ連の国内経済問題であった資源開発は、きわめて大きな国際問題としてクローズアップされた。

ソ連は協力の見返りにはいずれも開発した資源の供給をもって応ずる条件を提示しており、これは、国際資源問題の先鋭化という状況のもとで、西側諸国にと

つても魅力ある取引となっている。かくて、ソ連の資源・エネルギー問題の国際化傾向が今後いつそう深まると予想される。

世界的にみて、天然資源が有限であり、現状においてもエネルギー資源をはじめ多数の工業原料の潤たくな供給がもはや当然ではない事情を考慮に入れると、ソ連経済を世界経済のなかに組み込むという視点に立ち、世界最大の資源保有国の資源開発促進に協力し、開発された資源を世界全体の利用に役立てることが肝要であろう。

ソ連の資源開発が国際化するなかで、ソ連の協力要請にもつとも積極的に応じているのは、日本である。日本とソ連の間では、日ソ・シベリア開発協力プロジェクトが具体化、一九六〇年代後半に第一次極東森林資源開発（KS）プロジェクトが成立して以来今日までに、十指に近いプロジェクトが進行している。それ

らは、日本側の資源供給先の多様化と安定化、工業製品輸出市場の確保という狙いに合致し、ソ連側の期待にはもちろんよくこたえ、日ソ経済協力は相互補完的である。

第1章 世界最大の天然資源賦存と生産

1 エネルギー資源

将来性に富む天然ガス

ソ連がもつ巨量のエネルギー資源のなかでも、埋蔵量がとくに豊富で、経済性も高く、将来性に富むのは、天然ガスである。現行のソ連第一〇次経済五カ年計画（一九七六―八〇年）でもすでに、石油、天然ガスおよび石炭のうち天然ガス開発を最優先する方向が明確に打出されており、天然ガス生産高は急速なテンポで伸びている。一九八〇年代に入ると、天然ガスがソ連のエネルギー増産を担う